



# 社 会 の 子

齋 藤 文 雄

吾国の昭和二十八年のしらべでは要保護児童数は七四三、五〇〇人といわれている。昭和二十五年の国勢調査の児童数は三四、六三三、〇〇〇人であるから、大体吾国の児童数の二%が要保護児童ということになる。これらの児童の内訳は

精神薄弱児	七八、三〇〇人
盲 児	一六、二〇〇人
聾 啞 児	二七、七〇〇人
肢体不自由児	一二九、二〇〇人
虚 弱 児	九八、一〇〇人
不良化児童	四一、一〇〇人

である。これらの児童の中で適切保護を欠くものが九二、三〇〇人、両親の労働又は病気のためわが子の保育不能というのが二六〇、六〇〇人もある。

そうして、これらの要保護児童の中で施設に收容されてい

るものは七一、二四五人、その内訳は次の通りである。

福祉施設	施設数	人所人員
助産施設	二二五	六二四
乳 児 院	一二七	二、七〇六
母 子 寮	五一	三〇、七三九
保 育 所	六、五六八	六三四、九五二
養 護 施設	四九八	二九、三六七
精神児施設	六三	二、九九三
虚弱児施設	一八	九〇二
肢体不自由児施設	一〇	五二七
盲 児 施設	二六	一、三五八
聾 啞 施設	二八	二、三六二
教 護 院	五五	四、七一五

してみると、これらの施設に收容されている児童数は要保護児童の全部ではないことが判る。以上の数字にしても、そ

の正確度については疑問がある。実際の数字の把握は頗る困難であり、大体の推定数と心得ておくべきものと思われるが、実際にはこんな数字では追いつかないものと想定される。たとえば精薄児の中で小学校に就学しているものは在籍児童の二、五パーセントというから四一万人になる。その中で特殊学級に入っているものは七〇〇学級で僅か二万人である。これはまだ良い。幼児期の精薄児にいたっては正確な数字はとらえられていない。七万八千という精薄児数は幼児期の正確な数字が得られたら倍化されるであろうことは考えられてよい。

さて冒頭からこういう問題を取りあげたが理由は何故か。幼児の教育のような正常児を対象とした機関誌に、以上のような問題は何の關係もないことのように思われるかも知れない。しかしながら私はそこにひとつの大きな問題があると考える。以下その点について話を進めてゆこうと思う。

吾々の日常の診療においていつも考えさせられることがある。ある乳児が或る小児科医の診療を受ける。小児科医はその乳児が精神薄弱児らしいと判断する。そういう場合にその判断をその場で正確に何の躊躇もなく両親に説明し得られるだろうか。多くの場合はそうでない。どうも少しおかしいようだからどこの研究所え、どこの病院え行って詳しくみてもらって下さいという場合の方が多い。診療医の紹介状をもって吾々の研究所を訪ねてくるような場合が非常に多い。何故

始めの医師は自分の診断を正確に両親に伝えないのか。診断に自信がないからか。勿論詳細な検査が出来ないという不利な点はあるかも知れないが、本当の理由は別にある。この子は精薄児であるといちどに説きよかせたら両親は原爆にあってと同じような衝撃をうけることを懸念しての思いやりである。一定の期間に徐々に諒解させ、両親の頭の混乱をできるだけ少くしてやろうという思いやりである。然らば何故医師にこのような思いやりが必要となってくるのであろうか。

戦争前はよく子供は将来大臣になるんだとか将官になるんだとか、将来の希望をのべたものであるが、さすがに戦後はそういう言葉は聞かれない。しかし、わが子を人間的に立派な子に生長させようという考えばかりとはいいきれない。まだ昔の夢を追う家族がないとはいいきれないようだ。わが子が健康で聰明で幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学と次々に滞りなく進学して、直ちに就職する。それが両親の理想であるのは結構であるが、あまりにも親の理想が大きき正常に育つことばかりで頭が一杯になり、それ以外のことを全く忘れている。そういう親にこそ心の衝激が大きく来るものである。

一体わが子を人間的に立派に生長させるということは一、家族だけでできることであろうか。出来るとしても、それは特殊な家庭であって例外でしかない。多くの子供は家庭的環境以上に社会的環境の圧力を被って生長するものである。そ

の社会に一步も眼をくれないで、ひたすら家庭的環境だけに  
おしこめておこうとする親がないでもない。元来子供はひと  
り立ちできることに限りないよるこびを持つ。早く親のきづ  
なから解放されようとする努力で一杯だ。幼稚園でさえ、子  
供たちに自分のことは自分でするようにと教育している。こ  
の子供の気持は早く社会の中へ飛び出してゆきたいという気  
持に他ならない。その社会は年齢的に違うが少くも幼児期学  
童期はお友達の世界、学級又は学校を単位とした社会である。

家庭ではどんなに気をつけても、子供が自ら飛びこんでゆ  
く家庭以外の子供の社会に欠陥があったら、それはどうい  
ことになるであろう。子供の親は社会を呪う。あの子と遊ん  
ではいけない、あの地区では遊んではいけない、そして子供  
の社会的環境をだんだん狭いものにしてゆく傾向がある。子  
供の保育というものが家庭だけで可能な時代は、もうとっく  
に過ぎた筈だ。終戦当時のあの苦しい時代こそ、子供は各々  
の家庭だけの責任で育てられたかも知れないが、もうそとい  
う時代は過ぎた。社会全体、少くも自分の子供と交渉のある  
同時代の子供全体を考えないで自分の子の幸福はあり得ない  
時代となって来た。

先程精薄児を診断した時医師がその場で断定的な説明をな  
しえないといったが、それは結局両親の心構えができていな  
いからである。これは精薄児には限らない先天的な身体的欠  
陥、精神的欠陥をもつ子、思いもかけぬ後天的な障害、たと

えば怪我、脊髄前角炎などで突然にわが子が肢体不自由児の  
烙印をおされた時、日本脳炎、流行性脳脊髄膜炎などで思い  
もつかぬ智能障害を被った時、そういう不幸な子を持たされ  
た両親はこの世の中が暗黒になったほどの不安と焦燥にから  
れる。わが子だけはそういう不幸は見舞われぬものと初め  
から信じて疑わぬ両親に突然不幸が訪れるのであるから、  
心の乱れるのも無理のない話である。しかし世の中には沢山  
な親が同じ不幸で悩んでいることはふだん考えてみたことが  
あるだろうか。

今度はそういう不幸な子供たちの立場になって考えてみ  
る。何の罪もないこれらの不幸な子で同輩の子供たちから受  
ける精神的、身体的な迫害はどれほどであろう。いちいち記  
すにはあまりにも多すぎる。更に同輩の子供たちの侮蔑  
だけならまだ良い方で、現在でも小学校の又は中学校の教師  
でさえこれらの子に迫害を加えてゆくようなことがあるので  
ある。どうしてこういうことがありうるのであろうか。結局  
は無智というほかはない。人の子なら要保護児童は厄介視す  
る。自分の子がそうなると将来への希望を失って失望落胆す  
る。要するにこの心情は社会というものの本当の姿に目をむ  
けないで、自分の描いた理想の社会だけの中に吾子をおいて  
いるからである。精神的に身体的に痛めつけられた子が劣等  
感を持つのは当然である。そしてそれらの子供の何パーセン  
トかは迫害にも負けず、ぐんぐん正しく伸びてくるが、反対

に劣等感から反撥して種々の非社会的な行動をとるようになるのが増すことも事実である。そうして健康な子ども社会に出るとそういう子といっしょになって、この社会組織を礎きあげてゆく運命を背負わされる。

社会というものは、こういう恵まれない親、恵まれない子どもも含めて構成される。それを忘れている子供の教育は恐ろしい。戦争はもうこりこりだといっている日本人の生活はどうだろう。決して戦争を放棄していない。その証拠は一步吾家を飛び出してみれば到るところに弱肉強食のぶざまな日本人の社会面に遭遇することができ、自分だけがよければという無秩序な暴逆ぶりが日常茶飯事として何等とがめられないのが社会的通念であるかの如くである。これでは明るい社会の建設など及びもつかない。民主国家にはなつたかも知れないが不幸にして宗教のない民主国民には真の民主社会を享受するの資格がないものごとくである。

私が幼児教育でとりあげたいのはこの点である。いたずらに幼稚園の数ばかりふえても、どんなに設備のよい幼稚園がふえても、不幸な同胞にサービスする気持を子供たちに培う努力がなされなければ、結局昔の英雄崇拜主義的な非民主的な考えに支配されてしまうような気がする。評判のよい幼稚園には志願者が殺到する。しかし評判がいいというのは何のためか、よく詮索してみると多くは物的条件であったり、進学容易という道が開かれたところであったりする。子供の教

育に最も尊重されることはもうわが家のわが子という考えではない。わが幼稚園のわが子でもない。子供と同年輩の日本中の子供の中のわが子ということである。不幸な子を蹴落して自分だけがよい子になってみたとして、決して社会は明るくはならない。不幸な子は不幸な子なりにその天分を伸してやれるような社会であってこそ、どの子も明るい。冒頭に掲げた推定数字はともかく、健康な子ども、その両親も、またそういう子を預る幼稚園も、そこで働く保母も、自分たちだけがいいということだけでなく、みんながよくなるということに、そろそろ新しい方向づけをしてゆく時で来ているということを訴えたい。

そういう仕事は国家の仕事であるという人がある。なるほど国としては大切な仕事であるが。前記の統計数字の物語るように、その内容は甚しく貧弱であつて話にならない。その内容も一日も早く豊富なものにするためには国民の声が必要である。私たちがみんな声をあげよう。決して貧乏国だからできないのではない。偽キリスト教徒が十二月二十四日には一夜で三億の金を銀座で浪費している。一方クリスマス御祝いもできない憐れな保育所もある。要するに金がないからではない。金の使い方を知らないからである。私たちの声で一日も早くどの子も楽しく手をつなぐことができるような社会教育をすすめてゆきたいものである。幼稚園もその意味での計画をすすめて頂きたいのが念願である。